

「私も行けば良かった！」

話を聞いたマリーの最初の感想がそれだったが、そのときのコナンには、彼女を叱り飛ばす気力は残っていなかった。

ピッチャード・ロイロットの死はーと言うより、彼の屋敷で起きた大爆発は、博士の実験が失敗した結果として報じられた。

大衆紙の記事によれば、「学会を追われた不遇の科学者が、起死回生を掛けた世紀の大実験」だったのだそうだ。ロンドンの人々は新聞を片手に大いに驚愕し、次の週には彼の名前も忘れ去っていた。

クラウスには真実を伝えたが、賢明な彼は自前のスキットルをグビリと呷って、聞かされた真相に速やかに蓋をした。スコットランド・ヤードの警部ともなれば、その手の手腕は不可欠なのだろう。

「真相は闇の中、か……」

「元より、《ジャック・ザ・ナイトメア》やモリアーティ一味の存在も、世間的にはいまだ闇の中さ。僕らが察知できてないだけで、似たような事案は、幾らでも転がってるのかもしれない」

事件を振り返った二人はそんな会話を交わしたが、ロイロット家の屋敷が吹き飛んだ翌日には、アーサーはまた、捜査のために単身出かけ始めていた。

そして、ヘレンが持ち込んだ事件が終わったいま、コナンの手元には、兄の死に関する資料だけが残されている。

アーサーに相談しようと、一度は決意した。しかし、そのきっかけが掴めないまま、コナンはまだ一人で悩みを抱え続けている。

今回の事件では、《ジャック・ザ・ナイトメア》たちの手際が、ひと際見事だった。狂気を抱える犯罪者たちを駆除する、組織化され、訓練された戦士たち。コナンやアーサーのような素人とは違う。プロフェッショナルとしての「格」を見た気分だ。

彼らを「正義」だと考える気は毛頭ない。だが、「必要悪」ではあるのかもしれない。そう、いまのコナンは感じていた。それだけ、ヘレンが見せた欲望や盲信が、コナンには恐ろしかったのだ。

「……アーサー？ いるか？」

その日。大学から帰ったコナンは、アーサーの部屋のドアをノックし、返事ないので確認して、つい、ほっとした。

ヘレンの一件以来、アーサーとはろくに話す時間もないままだ。だが、だからこそ、コナンは兄の件を保留したままで済んでいる。

悩みを打ち明けない「理由」があることに安堵している自分に、コナンは複雑な気持ちを抱いた。

「……やはり、巻き込みたくはないものな……」

今回、ヘレンは最初から明確にアーサーを狙っていた。切り抜けることはできたが、彼は、殺され掛けているのだ。

あのとき屋敷に夜会服のジャックがいたかどうかはわからない。しかし、アーサーがモリアーティ側の《解放者》に狙われた事実は、彼にも伝わっているはずだ。とすれば、ホームズ家の部下を自称した彼は、これ以上アーサーを危険に晒さぬよう、裏から手を回すはずだった。

アーサーが一人でどこをどう嗅ぎ回ったとしても、彼の身の安全は保証されると思われた。

しかし、コナンがアーサーを兄の件で巻き込めば、彼は自らの意志で、また危ない橋を渡るうとするだろう。コナンは横にいて、それを抑止できる自信がなかった。

無論、だからといって兄の死の真相を諦めることは、コナンにはできそうにないのだが。

「……………」

銀助がいなくて幸いだ。コナンは、他に誰もいないリビングで、椅子に座ったまま、じっと目を閉ざした。

しかし、

「コナンさん？ いまいいかしら？」

ノックに続いて、ターナ・ハドソンのおっとりとした声がドア越しに聞こえてきた。コナンが慌ててドアを開けると、ターナはにっこり微笑みながら、封がされた小包みを差し出した。

「はい。貴方が留守の間に、お届け物があつたのよ」

「ああ、いつも済みません」

「とんでもない。気にしないで。それより、紅茶でもいかがかしら？」

「では、お願いします」

コナンが笑って頷くと、ターナは「待ってて」とにこにこしながら階段を降りていった。

コナンは一度ドアを閉め、受け取った小包みを改める。

差出人を見て、強張った。

小包みには、「J」とだけ記されていた。

「……………」

軽く薄い小包みだ。コナンはある予感に押され、封を解き、包みを開けた。

予感は当たった。中に入っていたのは、一枚の仮面だった。

もはや見慣れた悪夢ナイトメアの仮面。そして、仮面にはメモが添えられていた。メモにはなんの伝言もなく、ただ住所が書かれている。

「……スカウト、か……」

コナンはゆっくりと目蓋を閉ざす。

胸中で何度も自分に問いかけた。いいのか。これで正しいのか。コナン・ワトソンの「欲望」が、真に欲しているものはなんだ、と。

コナンは奥歯を噛み締めた。そして、目を閉じたまま、自らの顔に仮面を被せた。ゆっくりと、閉じていた目を開ける。

仮面の視界は酷く狭い。だが、だからこそ迷いが無い。

「……いいよな、兄さん？」

*

「……あら？ コナンさん？」

ノックに反応がなかったので、ターナは自分でリビングのドアを開けた。しかし、室内にもコナンの姿はなかった。用意した紅茶セットをテーブルに置き、何度かコナンを呼んだが、やはり返事はなかった。

「どうしたのかしら？」

アーサーならともかく、コナンがこんな風になくなるのは珍しい。とはいえ、アーサーではなくコナンなので、紅茶が冷める前には戻ってくるだろう。

ターナは椅子に腰掛け、コナンを待つことにした。ただ、ちらっと皿の上のスコーンを見たあと、こっそりひとつ手に取って、あむつと齧り付いた。

先にスコーンを味わいながら、ターナはのんびりとコナンを待つ。

コナンは戻って来なかった。

夜になっても。

夜が明けても。

*

幕間

「これでいよいよ、全面戦争だな」

報告を受けた大佐の台詞に、モリアーティは静かに目を閉ざす。

ピッチャード・ロイロットとは、長いつき合いだっただ。それこそ、目の前の大佐と同じほども古い。モリアーティが最初にロンドンに根を張ったときの、組織創設時の面子だ。また、いまも「幹部」と言える数少ない一人だった。彼の妻に《ギアス》を授けてから彼との関係には変化が生じたが、それでも、彼がモリアーティにとって、掛け替えのない「力」であったことは間違いない。何より、自分と同じ高みに立って会話できる、貴重な「友」の一人だった。

「……さようなら、ピッチャード。君とヘレンが、真の自由を手にしたことを祈るよ」

モリアーティは厳かに黙祷したのち、閉ざしていた目を開け、大佐を見据えた。

「《ジャック》の凶刃は、的確にこちらの血管を斬り裂きつつあるようだ」

モリアーティの言葉に、大佐が頷く。

モリアーティは氷の眼差しで告げる。

「これ以上、過去の因縁に煩わされるのは本意ではない。《沈黙館の魔女》たちがどこまでやる気なのかわからないが……受けて立とう。」

《ジャック・ザ・ナイトメア》と決着を付ける」